

三井のリフォーム 住生活研究所 所長 西田 恭子

別寝室のテレビ取材

先日、基テレビ局の取材を受けた。テーマは当研究所がレポートを出した『夫婦別寝室』だ。

このテーマの場合、「家庭内別居」や、「卒婚」を裏テーマとすることがあり、そんな時代を表す新語は、どうも私には腑に落ちないので、意図を再確認した。今回は、夫婦の寝室の形態について正面から考えてみようという番組だったのでお受けすることにした。

三井不動産リフォームの新宿三井ビル内にあるモデルルームも、緩やかな別寝室に作り上げられている。

時代にマッチしたそのモデルを紹介しながら今や別寝室だからと言って、おかしいことではないと話すのが、まだ別寝室を紹介すると「仲が悪いからだ」と言い放ったり、同寝室の方が「うちはダブルベッドですよ」と、あたかもそれが仲良しの証のように、誇らしげに話されることがある。

取材の中でも「西田さんは卒婚をどう思いますか？」とストレートに聞かれたが、その言葉を使いこなしていいので、はつきりとは答えなかった。卒婚

は、長く連れ添った夫婦が子供の独立や夫の定年退職などを機に、婚姻関係は解消せず、それぞれの新しい道に進んでいくライフスタイルのことと言われている。離婚とは違い夫婦の相互信頼の延長線上でお互いの関係をリセットし、自由に人生を楽しむポジティブな選択肢。「卒婚しよう」を宣言することで、二人が円満な老後を過ごすことができるのではと言われる。

その通りと思う方、何を言いたいのかわからないと思う方、それぞれだろう。またそのほかの最近の新語に「孤育て」というものがある。地域コミュニティの衰退や、核家族化の進展により子育てが孤立して行われていることをいうようだ。時代のかかえている問題をストレートに表現しているように思う言葉だ。次々と出るたくさんさんの新語が言葉遊びにならず、次世代への新しい価値創造につながる感じを感じる。

今回のテレビ取材では私の話だけではなく、同時に実際に別寝室にリフォームされたお客様の家の取材も行われた。子供の独立と結

婚、孫の誕生も迎えて、名実ともに子育てが一段落したご夫婦の自宅改装での別寝室だ。

終の住処として考えた別寝室の選択が、布団派のご主人とベッド派の奥様。日の出とともに活動するご主人と、遮光カーテンで朝日を遮る奥様。双方の違いを明確にしたうえで、の寝室作りとなっている。

取材に答えるお二人の会話がとても素敵で、別であることがどんなにいいかを語り合いつつ、そこはかとなく相手への思いやりが感じられる別寝室談義だった。このプランに関わったリフォームプランナーも「仲がいい夫婦だからこそ別寝室にするんですね」と言っていた。

放映後に知人や親戚から「見た！」と電話やメールが入ってきた。開口一番語られたのは、身に着けていたネクレスがいいとか笑顔で話すのが良かったとか、本来のテーマ以外の感想なのは少しがっかりした。夫婦別寝室と聞くと、タイトルだけで私が出るのではと、告知なしでも広がることに改めて驚いた。



西田恭子氏のプロフィール「一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手がけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。日本建築家協会正会員。」